祈りに関する覚え書き
―カトリックの伝統を手掛かりに―

池　田　有 紀 子

אם־אחפץ במות הרשע כי אם־בשוב רשע מדרכו וחיה
わたしは罪人の死を望まず
悔い改めて生きることを求めている
エゼキエル書 33 章 11 節

本稿では祈りについてキリスト教、とりわけローマカトリック教会の伝統を手掛かりに考察する。はじめにカトリックの伝統的祈りの生活を概観する。その後、祈りのテキストを解釈して祈りのポジティブな働きを確認する。そして、祈りに生きた先人の経験から、祈りのネガティブな働きを追う。祈りのネガティブの克服には労働が有効であることを導き、労働の意義を修道院の生活から確認する。最終的に、すでに祈りに親しんでいる人が更に祈りを深めるためにはどうすれば良いのか、という問いに答えることを目指した。

I. 祈りの伝統と生活

1. 生涯、一年、一週間

カトリックの生活は伝統の継承により、生涯がイエス・キリストと共に歩むように構成されている。目に見えない神の恩恵を目に見える印として受ける秘跡（Sakrament）は、洗礼（Taufe)、堅信(Firmung)、聖体（Eucharistie)、ゆるし（Beichte)、叙階（Weihe)、結婚（Ehe)、病者の塗油(Krankensalbung)、の７つがある。これらの秘跡を通し、信徒は神に結ばれた人生を意識的に選択していく。更に、一年という単位でもキリストの生涯を思い起こして生きていく教会暦(Kirchenjahr)がある。キリストの誕生を待つ待降節（Advent)、キリスト誕生を祝う降誕祭（Weihnachten)、イエスが悪魔の誘惑を受けた期間になぞらえた四旬節（Quadragesima)、イエスが受難を受ける聖週間(Karwoche)、そしてイエスが復活する復活祭（Ostern)、神の霊が地上に降って来る聖霊降臨祭(Pfingsten）が大きな節目となっている。待降節と四旬節は降誕祭と復活祭を祝うための準備期間としてある。上記以外にも多くの祝日や記念日があり、それぞれの日に応じた典礼で祝われる。

一週間の中では日曜日は小さな復活祭と考えられ、木曜はイエスが弟子たちにパンを割いて与えた聖木曜日（Gründonnerstag)、金曜はイエスが十字架に架けられた受難の日（Karfreitag）を思い起こして、イエスの生涯と重ねられている。

2. 聖務日課

聖務日課（Stundengebet）は一日の中で決められた時間に主に詩編を唱える祈りである。聖職者だ

けでなく、一般信徒にも開かれた祈りである。ヌルシアのベネディクトゥス（Benedictus de Nursia, 480 頃～ 547/60 年頃）が創立した修道会であるベネディクト会は、現存するカトリック修道会の中で最も古く、祈りを重視する観想修道会（kontemplativer Orden）である。現在でも修道士、修道女らは『ベネディクトゥスの戒律』*Regula Benedicti*（以下『戒律』）に従い、聖務日課を行って生活している。ベネディクト会の聖務日課についてまとめることで、一日の中での祈りの伝統を描写したい。尚、聖務日課は教会暦とも結びついており、教会暦のどの時期か、どの祝日かによって、詩編や賛歌が変わる。従って、聖務日課は単に一日の祈りではなく、一年の流れの中で位置付けられた一日の祈りと言える。

3. 聖務日課の概観

ベネディクト会の聖務日課の入門書である『日に七たびわたしはあなたを賛美する』*Sieben Mal am Tag singe ich dein Lob*（2012）を参照し、この祈りについてまとめる。

キリスト教の前身であるユダヤ教、その伝統たる詩編の祈りが、キリスト教にも受け継がれて聖務日課の主たる構成要素となった。初期の修道士は毎日 150 編の詩編を一日で祈っていたが、今日では一週間に 150 編の詩編で祈るようになっている。修道会に所属する聖職者は聖務日課を決められた時間に修道院内で集まって祈る。一方、修道会に属さない聖職者は聖務日課の短縮版を一人で祈る。

ベネディクトゥスが著した全 73 章の『戒律』（530 頃）の中で、13 章が聖務日課の記述であることからも、彼がこの祈りを重視していたことがわかる。聖務日課の回数や時間について、ベネディクトゥスは『戒律』16 章に記している。聖書に「日に七たびわたしはあなたを賛美する」（詩 119:164）、「夜半に起きてあなたの正しい裁きに感謝をささげます。」（詩 119:62）とあるので、7 回と夜半を合わせて一日に合計 8 回の祈りを定めている。この夜半に目覚めて祈る祈りは、暁課（Vigil）と呼ばれる一日の最初の時課にあたる。『戒律』では第 8 の時刻、現在のおよそ午前 2 時に定められている。この祈りは「主よ、私の唇を開いて下さい、」「私の口があなたの賛美を告げ知らせるために。」という言葉で始まる。第二ヴァチカン公会議で典礼形式が変更されてからは、この時課は一日のどの時間にでも祈ることができるようになった。

続く朝課（Laudes）は朝の 6 時から 8 時の間に捧げられる。9 時頃に三時課（Terz）、12 時頃に六時課（Sext）、15 時頃に九時課（Non）、そして朝課の前に一時課（Prim）が祈られていたが、これらの 4 つの時課は時間的に短い祈りであったため、第二ヴァチカン公会議の改革で正午にまとめられることになり、昼課（Mittagshore）となった。

18 時頃に祈られる晩課（Vesper）は朝課もそうであるが、詩編、小朗読、答唱、賛歌、唱句（Versikel）、福音書からの賛歌（Canticum）で構成される。

一日の最後の時課は終課（Komplet）と呼ばれる。この祈りは一日を振り返り、就寝する夜の間も神に守られることを祈るものである。この終課の後は大静寂（die große Stille）と呼ばれる沈黙の時間である。ベネディクトゥスは沈黙を重視し、修道士は沈黙の修養が求められる。『戒律』6 章に、沈黙の理由は言葉によって過ちを犯さないためと記されている。それに加えて、『戒律』のプロローグは「聴け」Obsculta で始まり、神の声を聴くことを繰り返し求めている。沈黙の重視は神の声を聴く為だと考えることができる。

大静寂で口を閉ざして眠りに就く、そして目覚めて暁課に集まり「主よ私の唇を開いて下さい」

「私の口があなたの賛美を告げ知らせるために」と歌い、新たな一日が始まる。

簡単に聖務日課の流れをまとめると、暁課、朝課、昼課（小時課）、晩課、終課となる。修道院ではこれにミサが加わる。以上のように、一生、一年、一週間、一日という単位で祈りが人生と生活に織り込まれている。この枠組みを踏まえて、以下で祈りの内容と体験に目を向けていく。

II.「マグニフィカート」と「主の祈り」の解釈より

1. 聖務日課の中での位置付け

祈りを理解する手掛かりとして、祈りのテキストを解釈する。取り上げるのは「マグニフィカート」Magnificat と「主の祈り」Pater Noster である。どちらも新約聖書からのテキストを用いた祈りである。

これらの聖務日課の中での配置は、「マグニフィカート」は晩課[1]の際、福音書からの賛歌（Canticum）で、「主の祈り」はミサと朝課、晩課の際に祈られる。いつでも個人で祈ることができるのは言うまでもないが、共同の祈りの時間だけを取り上げても頻繁に祈られる程、これらの祈りは広く親しまれてきた。

2.「マグニフィカート」の解釈

ルカによる福音書の中で、神の霊によって身籠ったマリアが、同様に霊によって身籠った不妊と言われていたエリザベトを訪れた。その時、エリザベトはマリアに「あなたは女のうちで祝福された方です……主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方はなんと幸いでしょう。」（ルカ 1:45）と言った。その言葉に対し、マリアは「マグニフィカート」に続く神への賛美で応える。エリザベトとマリアの出会いは二人の不妊の女、つまりおとめと高齢者、未成熟と老いの表現である。両方の不毛な母体に生命を宿らせることで、神の全能が表現されている。この神の業の実現に求められるものは、エリザベトが言ったように、神のことばを受け入れ信じるということである。信じるということが、偉大な性質であることが聖書の中で度々述べられている。

エリザベトの夫ザカリヤは、エリザベトが子供を産むという天使の言葉を信じなかった。そのため口がきけなくなる（ルカ 1:5-22）。旧約聖書の中で神が預言者らを召命したときも、同様であった。神がエレミヤを召命した時、エレミヤは「わたしは若者にすぎませんから。」（エレ 1:6）と受け入れることをためらっている。イザヤが召命された時、彼は天に主とセラフィムを見て怯えている（イザ 6:5）。モーセも神からの召命を受けた時に「神を見ることを恐れて顔を覆った。」（出 3:6）そして神がモーセにイスラエルの民をエジプトから救い出すように告げた時、何度も神の要求から逃れようとしている（出 4:1-17）。このように、旧約聖書の偉大な預言者らであっても神のことばが臨んだ時に恐れを覚え、逃れたいという衝動に襲われた。

一方、マリアは天使が受胎を知らせた時、「お言葉どおりこの身に成りますように。」（ルカ 1: 38）と受け入れている。エリザベトはマリアの信心を「幸いな」と形容している。彼女の信心を褒めるエリザベトの言葉にマリアはこう応えた。

≪ Magnificat anima mea Dominum,

et exsultavit spiritus meus in Deo salvatore meo,
わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。（ルカ 1:47）

彼女は自分に褒められる点があるとは思っておらず、自分ではなく主人である神が素晴らしいのだと主張している。マルティン・ルターは喜びをもって神を賛美することは人の業ではなく、神の業であると表現しており、全身全霊をもって神に依り頼む者だけがこのような感動をすることができると述べている。

quia respexit humiliatem ancillae suae.
Ecce enim ex hoc beatam me dicent omnes generationes,
身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。
今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう、（ルカ 1:48）

なぜ彼女の魂が神を称えざるを得ないかというと、取るに足らない下女に過ぎない自分にも目を留めて良く扱ってくれたからである。目を留める respexit（原文 ἐπέβλεψεν）には「尊重する」「敬意をもって扱う」という意味もある。従ってマリアは自分が神の前につまらないものだと思ってきたが、神の方は深い愛情でこの上もない待遇を自分にしてくれたと感じている。

和訳からは消えているが、「見よ」「見よ、ここに」にあたる Ecce（ἰδού）に注目したい。Ecce が指し示しているのは「今から後、いつの世の人も わたしを幸いな者と言うでしょう、」である。Ecce によって、この言葉を確信に満ちて言っていることが感じられる。自分自身を高めるためではなく、神が恵み深いことの証拠として自分自身を差し出している。マリアの確信の理由が続く。

quia fecit mihi magna, qui potens est,
et sanctum nomen eius,
et misericordia eius in progenies et progenies
timentibus eum.
力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。
その御名は尊く、
その憐れみは世々に限りなく、
主を畏れるものに及びます。（ルカ 1:49-50）

「力ある方」の名前を「尊い」ラテン語で sanctum 原文では ἅγιον「聖なる」と言うことで、ユダヤ教では発音しない神聖な神の名を表している。旧約聖書では、神の名は יהוה の神聖四文字で書かれている。しかし、十戒の中で「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」（出 20:7）とあるため、この四文字は אדני（アドナイ、わが主）もしくは השם（ハシェム、その名、御名）と読み換えられてきた。マリアは彼女を救ったのが聖なる名の持ち主であると言うことで、彼女に成された恵みが旧約聖書の歴史の中で神によって成されてきた救いに連なるものであることを示唆している。旧約の中で、神を畏れ敬う者に代々神の憐れみがあったことが記されている。同様の恵みを受けた

マリアは自分を通して神の業が成り、人々が後年も聖書の中の出来事を想起する如く、自分が受けた神の恵みも知られると確信している。続く言葉で具体的な神の救いを旧約の歴史に遡り示している。

Fecit potentiam in brachio suo,
dispersit superbos mente cordis sui;
deposuit potentes de sede
et exaltavit humiles;
esurientes implevit bonis
et divites dimisit inanes.
主はその腕で力を振るい、
思い上がる者を打ち散らし、
権力のある者をその座から引き降ろし、
身分の低い者を高く上げ、
飢えた人を良い物で満たし、
富める者を空腹のまま追い返されます。（ルカ 1:51-53）

モーセによる出エジプトでは、エジプトの奴隷とされていたヘブライ人たちがエジプトを脱出する際、神はエジプトに災いを送り、更にヘブライ人たちが財宝を持って出発できるようにした。エジプト軍はモーセらを追ってきたので、神はモーセに海を二つに分けて乾いた所を通るように命じ、追って来たエジプト軍の上に海の水を戻して全滅させた（出 3:1-14:31）。旅の途中、飢えたヘブライ人らに神はマナを降らせて飢えを満たした（出 16:14-31）。そして 40 年の間、荒れ野をさまよい、モーセの死後、ヨシュアに導かれてイスラエルの民は神に約束されたカナンの地、乳と蜜の流れる土地に辿り着く。

Suscepit Israel puerum suum,
recordatus misericordiae,
sicut locutus est ad patres nostros,
Abraham et semini eius in saecula ≫.
その僕イスラエルを受け入れて、
憐れみをお忘れになりません、
私たちの先祖におっしゃったとおり、
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。（ルカ 1:54-55）

カナンは創世記 12 章で神がアブラムに「あなたの子孫にこの土地を与える」（創 12:13-17）と約束した土地であった。後に彼は神からアブラハムと名乗るように言われる。創世記には神がアブラハム、その子イサク、イサクの子ヤコブと共にいたことが書かれている。故に神がモーセに現れた時も、「私はあなたの父の神である、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」（出 3:6）と言っている。ヤコブは神によってイスラエルと名付けられ（創 32:29）、アブラハムとイサクに与えら

れた土地を彼と彼の子孫に与えると約束する。イスラエルの子孫たちは増えて、イスラエル人と呼ばれる程に多くなった。「イスラエル」という言葉はイスラエルの民を表し、更に、神を信じる民という意味で使われるようになる。つまり、マリアは、創世記、出エジプト記をはじめとする律法（トーラー）に記される神の救いの業を思い起こしながら、神を信じる者への憐れみに言及したと考えられる。

神を畏れ信じる者の生き方は、自己放棄と神の意志との一致による自己超越と言える。自己放棄は神への自己投企と言い換えることができ、恐怖が伴う。それまでの自分の枠組みや限界、自分の生きている世界の外へ出ることになるからである。聖書の中でその恐怖を超えさせてきたものは、神への信頼であった。マリアは、当時は男性の所有物としての扱いを受ける立場の弱い女性であったこともあり、自分が時別なものでなく、むしろ無力なものだと感じていたと推測できる。けれど、その無力さを自覚していたために、すべての信を神に預け、神からのことばを受け入れたと考える。自分の力に依り頼まない全くの無力さから、彼女の偉大さが現れるに至った。マリアの「マグニフィカート」の言葉で祈ることで、祈り手はマリアの歓喜を追体験し、彼女の様に神と関わる可能性が開かれる。

3.「主の祈り」の解釈

イエス・キリストが弟子たちに教えた祈り（マタ 6:9-13, ルカ 11:2-4）は、今日「主の祈り」と呼ばれている。カトリック司祭のローフィンクはこの祈りがあまりにも有名で頻繁に祈られているため、惰性で唱えられる憂うべき状態にあると指摘している。彼の『主の祈りの新解釈』*Das Vaterunser neu ausgelegt*（2008）を参考にして、この祈りの意味を理解したい。テキストはマタイによる福音書のものを用いる。

> Πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς·
> Pater noster, qui es in caelis,
> 天におられるわたしたちの父よ、（マタ 6:9）

人間が神を父と呼ぶことができるのは、神の子が人間イエスとして生まれたからである。イエスによって人は神を父と呼ぶことができるようになった。生みの親を捨ててイエスに従った弟子たちに、神によって結ばれた家族が与えられる。家長である父親、つまり神は子らに心を配り、保護を与える。天とは比喩的に神のいる場所である。人間の思惑を遥かに超えた次元を暗示する。天にいる神を父と呼ぶことで、祈り手たる子も天に帰属する者となる。

> ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου·
> sanctificetur nomen tuum,
> 御名が崇められますように。（マタ 6:9）

父の名が聖とされるのは、イエスに従う者の間においてである。イエスに従う者が増し、神の前の家族という共同体が広がって、より多くの人が神の名を敬いますようにという願いである。

ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου·
adveniat regnum tuum,
御国がきますように。（マタ 6:10）

信仰によって結ばれた共同体が実現することを願う。それは天の国、神がいる天のような場が地上で実現されるということである。「国」と訳されている語 ἡ βασιλεία（regnum）は領域という意味である。御国とは神の支配を受ける場と言える。

γενηθήτω τὸ θέλημά σου,ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ γῆς·
fiat voluntas tua, sicut in caelo, et in terra.
御心が行われますように、地におけるように地の上にも。（マタ 6:10）

神はこの世を神がいる天のように創ろうとしている。その計画を実現させるのは人を通してである。この祈りの行為の主体が明らかでないのは、人間の積極的な協力によって、この祈りが実現されるからである。神の意志を祈り手が明確な決意で地上に実現していくことが言われている。

τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δὸς ἡμῖν σήμερον·
Panem nostrum supersubstantialem da nobis hodie;
わたしたちに必要な糧を今日与えてください。（マタ 6:11）

イエスと弟子たちは旅に出て神の言葉を伝える。神の働き手として生きる彼らに衣食といった生活に必要なものを心配する暇はない。神の国を伝えることが最優先であるからだ。家庭で家長が子供らの生活の面倒を見るように、神がイエスの弟子たちの生活の必要を満たす。「必要な」ἐπιούσιον という語をローフィンクは「今晩の」「直近の」食事という意味に解釈している。未来の食事を先回りして心配するのではなく、必要な時に、必要なだけ神が与えてくれる、という信頼を表している。

καὶ ἄφες ἡμῖν τὰ ὀφειλήματα ἡμῶν,ὡς καὶ ἡμεῖς ἀφήκαμεν τοῖς ὀφειλέταις ἡμῶν·
et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos dimittimus debitoribus nostris;
わたしたちの負い目を赦してください、
わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。（マタ 6:12）

神がいつでも何度でも人を赦すのだから、人もまた他者を許さなくてなならない、人を赦すことは神に仕える前提条件であるとローフィンクは述べている。イエスは、天の国では王（神）が家来を憐れんで借金を帳消しにした様に、家来も自分に借金している仲間を憐れむべきだ（マタ 18:23-35）と語っている。まず、神と祈り手自身との関係を考え、神に大きな負債を許されたと感じられることが肝要ではないだろうか。その気付きを第一歩として他者への赦しに発展するように思われる。神と祈り手との関係が、祈り手と他者との関係へと映し出される。他の人を赦すことは、自分に与えられた恵みへの感謝の表現となるのではないだろうか。

καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν,ἀλλὰ ῥῦσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ.

et ne inducas nos in tentationem, sed libera nos a Malo.

わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。（マタ 6:13）

誘惑は悪魔によってなされる。ローフィンクは悪との対決は召命と関係があり、神が人を悪と対決する場へ導くことがあると述べている。悪に曝される極限状態で、人は善か悪か選ばなくてはならない。神に選ばれた人間が、本当に神の意志を選択できるかが試される。ここでは、試みが弟子たちにとって耐えられない程過酷なものとならないことを願っている。

「主の祈り」は我々の今日において実現される世界についての祈りである。今日、今が長い時代の果てであり、新しい歴史の始まりである。新たに生まれ続ける現在という時間の中で、悪の力から引き離されて善に生きられるように願っている。

このように「主の祈り」は、神を信じる者が、父なる神の子供として結ばれ父の為にこの世を作り変えていこう、そのためにこれまで自分が持ってきた人の世の価値観を捨てて、神の意志を自分の意志として積極的に働き、神の国を創り広げていこうとする祈りである。つまり、従来の世の価値観とこれまでの自分の生き方から脱却する、自分自身を神に似るものへと変える祈りである。そのため、ローフィンクは、本来は自らを変える覚悟のあるものが祈る祈りだと強調している。

4. 解釈の考察

「マグニフィカート」と「主の祈り」の解釈を通して、これらの祈りが人生に変容をもたらす祈りであることが見い出せた。もう少し発展させて考えると、これらの祈りによって人が神の領域で生きる者へと変容していく、そうなると、祈り手の「自分自身の欲求」が「神の欲求」へと近付いていく。祈り手の望みの実現が神の喜びとなるものへと変容し、祈り手が自らの願いの実現へと向かって生きることが、神の意志の実現となる。そのように、祈る人と神との結び付きが強められていくと考えられる。祈りによって人は、神、時間空間を超越する存在へと積極的に働きかけ、より善きものへと変容していく。

祈りとは、有限なる人が無限なる神へと働きかけること、無限からの働きかけを受け入れ、有限なる大地（人）において生命の可能性を実現させること、その躍動的な営みではないだろうか。これら二つの祈りに限らず、神との関わりに開かれるという点において、祈りには人生（命）を変容させる可能性があるといえる。

5. 神への自己投企と人生の意義について

神の呼びかけに応え、新たな人生を生きたおとめマリアと預言者らの召命について触れた。そしてイエスに従い、天の父の子として新しい命を生きていく弟子たちの祈りを見た。彼らを新たな生に招いた神の呼びかけと、人生の目的と意義について若干の考察を加える。

リーゼンフーバー（1971）によると、目的は根源的に善である。人が何か目的を持ち、それに向かう時、そこに努力の働きが生まれる。目的は目的自体に意味があるのではなく、その目的へと到達しようとする意志、行為の中で個人が能力を発展させていく可能性があるから、意味がある。故に目的は実現されていなくても、目的として意味がある。しかし、この目的は自分で作り出せるものではなく、人生の意味を創造するものとして与えられる。人にはそれを受け入れる、受け入れない

という自由がある。しかし、それを受け入れないと、人生に意味が見い出せない虚しい状態になる。

目的へ自己投企することで、現在の自分を捨て、現在の限界を超え出て自らを積極的に変化させようとする。つまり、自分自身をより善きものにしようとする。目的の根源の善が外的な目的を通して個人を自らに引き寄せようとする。個人にとって「意味がある」と感じられることは、具体的なその目的、それによってのみその人がその中で努力することができる、――言い換えれば、現在の自己の限界を喜んで捨て去り、発展へ向かおうと努力する――場である。目的それ自体ではなく、目的へと向かう努力している状態がすでに目的（意味 Sinn）の内にいると言うことができる。

もし目的を受け入れることを拒絶し、それに代わって自らが作り出した別の目的を目指した場合、たとえその目的が愚かなものであっても、目的自体が善に基づいているので、最終的に人を目的の目的たる努力（Streben）――自己超越の方向――へと導く。その自己超越は自己を高める意味だけでなく、自己を低める――その誤った目的なしには達せられなかったであろう低みへと自らを下らせる。目的を受け入れずに生きたことを、神の意志に反した罪、として考えるなら、この罪はなぜ起こったのだろうか。

ドミニコ会士、マイスター・エックハルト（Meister Eckhart, 1260 頃 -1327/28 年）の言葉は示唆に富む。

> 正しく神の意志へと移された人は、自分の犯した罪が起こらなかったことを望むべきではない。単に神に逆らったのではなく、あなたがその罪によって、もっとより多くの愛に結ばれ、そしてそれによって低められ謙虚にされたのなら、まさにそのために神に反したのだ。しかし神はそのような罪の運命をあなたに負わせたのではない。そこからあなたの最善のものを引き出そうとしたのだと、神を信頼して良いのだ。[2)]

つまり、より深く神を愛し、喜んで目的（意味）を受け入れるために、罪は与えられたと考えることができる。この点について、ヴェルテはエックハルト研究の中でこのように述べている。

> しかし、罪があるかぎりにおいて、つまり、罪が何か肯定的なものであり、人間を低め、神を高め、神に特徴的な慈悲の展開空間を神のために開くかぎりにおいて、神は、同時に、罪を意志したまうのである。そして、まさに、そのことにおいて、罪は、正しく考察すれば、善への道でもあるのである。[3)]

ある罪によって人が神に開かれたのであれば、その過ちも神の導きであったと考えられる。敬虔なフロレンス・ナイチンゲールは悪は善の敵対者ではなく協力者であると考えた。彼女は「悪は神の左手であり、善は神の右手なのです。」[4)] と述べている。問いに戻り、なぜ神からの意義を拒絶したのか、と考えると、より深く神を愛し、より大きな喜びで意義に身を投じるためではないだろうか。

以上のように考えると、目的（神からの呼びかけ）を受け入れ努力することで、人自体がその努力の過程で、一瞬一瞬において天と地を繋ぐはたらきとなる。自己超越によって地において天を現し、天からの呼びかけを地に実現（具現化）させるものとして、天地を繋ぐ者となる。すなわち、この世という生々しい現実の地平で神と共に生きる、そのような可能性が拓かれるのではないだろうか。

III. 祈りの負とその克服

祈りのテキストの解釈を通して、祈りが祈り手に変容をもたらす神（無限）との積極的な関りであることを導いた。以下では、祈りの発展に付随する問題を取り上げ解決を模索する。

祈りを深めていくと誘惑という危険に陥ることを先人たちが指摘している。イエズス会の創始者、イグナチオ・デ・ロヨラ（Ignacio de Loyola, 1491-1556 年）は誘惑を二種類に分けている。一つは霊的に未熟なものへの誘惑、もう一つは霊的に進歩した者への誘惑である。霊的に未熟な人には誘惑は快楽を提示して悪の中に留まらせようとする。一方、霊的に進んだ人への誘惑は偽りの理由で不安にさせたり悲しませたりして、進歩を阻もうとする。そして更に霊的に発展した人には、誘惑は神聖さを装って現れると指摘している。新約聖書にも「サタンでさえ光の天使を装うのです。」（II コリ 11:14）と書かれている。

イエズス会士、門脇佳吉は、自身の参禅体験と併せて道元の受けた誘惑について語っている。

> 道元の出会った誘惑には、「仏の形に化けて」くるものがあった。悟りは本来「仏に成る智慧」であるはずであり、真の悟りを得たものは、仏になるのであるが、「自分は悟って、仏になった」という考えに固執するならば、「仏の形に化けた」天魔に引っかかるのである。[5)]

祈り手が初期に憧れる「より善きもの」は求め続けるものであって、決して手に入るものや、辿り着ける地点という性質のものではないように思われる。祈りの経験を積むと、努力が大きい程に「手に入った」と錯覚してしまうのではないだろうか。けれども、祈りに生きた偉大な先人たちが神聖さを装う誘惑を受けたことから、祈って誘惑に遭わないようにすることも凡人には困難だと言わざるを得ない。道元はそのような錯覚に陥らないために悟りを求めることをやめ、ひたすら行に自らを投じた。修行の初期段階にあるものは迷いから悟りへ――暗から明へ――と向かうことが課題であり、修行の成熟期にあるものは、悟りの「明」から道の導きに従って闇に飛び込むことが課題であることを門脇は語っている。

カルメル会女、神秘家のアヴィラのテレジア（Teresa de Ávila, 1515-1582 年）も、祈りによってもたらされる甘美さに浸ることを有害と戒めて、祈りの陶酔状態から脱することが困難な場合は仕事に没頭して、この危険から脱するように警告している。

ここから言えることは、祈り手が神聖さという誘惑に捕らえられ祈りが深まらない場合、行や労働によって現実世界と積極的に関わることが誘惑の克服に有効だということである。祈りのポジティブな作用は現実という制限を超えて無限と関わることであったが、誘惑と思われる状態に陥った場合、現実原則と有限な自分という限界の中で労する方へ、かつて離脱に努めた世界へと方向転換しなくてはならない。

IV. 労働

キリスト者の祈りと労働の関係を整理したい。これまで述べてきた西ヨーロッパ修道会の基礎となったのがベネディクト会の生活である。ベネディクト会の生活の特徴は祈りが中心であり、それ

以外の時間は労働、もしくは霊的読書に充てられる。祈りが何よりも優先されるこの生活のモットーは「祈りかつ働け」Ora et labora である。ベネディクトゥスは祈りに次いで労働も重視した。第一に、「怠惰は魂の敵である」からだと『戒律』48 章に明記されている。坂口（2003）によると、ベネディクトゥスが修道士らに労働を要求したのは、霊魂の健康を保障するからである。当時の修道士らの多くは俗世では労働の必要のない高貴な身分であったので労働は苦行であったが、祈りよりも長い労働は、健康な修練となった。

ベネディクトゥスは人が労働なくしては生きていけないことを受け入れ、中庸の道を取って『戒律』を作った。『戒律』48 章 8 節に「わたしたちの教父と使徒たちのように、己の手で働いて生活して、はじめて真の修道士である。」と記されている。労働が修道生活に必要だというのは、単に物質的な理由からだけではない。ベネディクト会士による『祈りかつ働け』*Bete und Arbeite*（1982）の中で、砂漠の師父たちの話が紹介されている。労働を捨てて天使のように祈りのみに生きようとした若者が、生活できず結局は仲間のところに戻って来た時、仲間に「あいつは天使になったんだ！もう我々のような人間じゃないんだ。」「もしお前が人間だというなら、お前は働いて自分の食べ物を得なくてはいけない。」と言われる。

創世記で、アダムとエバがエデンの園から追放されるとき、神は「お前は額に汗をして働きパンを得なくてはならない」（創 3:19）と言った。修道者もまた、この人間に属し、人間であることから逃れることはできない。労働において修道者は自分の弱さや脆さを体験し、自分が人間であることを直視する。

また、労働なしの祈りのみの生活では自己満足に留まる危険がある。労働なしの祈りのみの生活では、生活を慈善家に依存するので、精神的にも慈善家に依存して結局、世俗的な精神から抜け出せないからである。

ベネディクトゥスの時代から、祈りを中心とする修道生活において労働は欠いてはならないものであった。そして、祈りの生活で心身を健全に保つ為に労働が有効であることがわかる。

V. 暗闇への道

1. 十字架の聖ヨハネの「暗夜」

神を求める生活をしていると、信仰初期の恩寵が試練の苦しみへと変化することをカルメル会士、十字架の聖ヨハネ（Juan de la Curz, 1542-1591 年）は記している。まず、人の世俗的、動物的欲求から離れ、より霊的なものを選ぶ意識的な努力が必要な信仰の初期段階がある。それから、能動的努力で神に近付こうとした人間が、受動的な浄化の過程へと引き込まれる。自らの努力によっては克服できない弱さ、不完全さを浄化して、より神に近付くために、人は苦しい体験の中へと投げ込まれる。その体験は、かつて神を求めて主体的に努力していた頃とは全く異なる拷問に耐えるような苦しい精神的状態となる。十字架の聖ヨハネはこの体験を「暗夜」と呼んでいる。暗夜に引き込まれるのは神がその魂を完全へと導こうとしているからだとし、火という神の愛が金属の錆を落とす様子に例えられる。浄化の最終的過程では、内なる不完全を燃やす火は人を苦しめ続けたが、不完全が燃やし尽くされると、苦しみはなくなり、神の炎がその人を包み、もはや傷つけることはない。

十字架の聖ヨハネは記憶、意志、感情を捨てて自らを空にすることで、人は純粋な神の力が働く

場となることを述べる。それほど徹底して自分自身を捨て切ることは、人間の努力のみでは不可能である。だから神が人を暗夜に引き込み、火の中で炙るようにして人の魂の不純物を焼き尽くそうとするのだと主張する。この時、人は神に見放されたように感じる、しかしヨブが最後に、自らを神について知っていると思っていたが、何も知らなかったと告白したように、神に対する正しい態度と自己認識を得ることとなる。

2. 暗闇という道への導き

ここまでを振り返ると、祈りに生きた先人らは、自己満足に安住してはいけないと警告しているかのようである。そして、祈りを深めるには精進し続けるしかないという結論が浮かび上がる。

禅からも同様の示唆を受けることができる。石井（2010）によると、禅の修行はダイナモライトを灯すことに例えられ、ダイナモを回し続けないと、つまり修行という実践を続けないと、悟りは消えてしまう。光を灯し続けるには行じ続けなくてはならない。禅では悟りに安住せずに更に上を目指すように言われるそうである。悟ったことに安心して何もしなくなると悟りの光は消えるからである。

エックハルト、アヴィラのテレジア、十字架の聖ヨハネ、これらの神秘家は自己と世俗から徹底的に離脱することを述べている。けれど離脱して隠遁者になることを目指しているわけではない。求められているのは、離脱の先、神との一致である。天に帰属し、神に似るものとなって逞しく地上で生きるための離脱であると考える。門脇は理性に照らされた日常世界を突破して道元の説く「道本円通」の宇宙へと飛翔することを以下のように説明している。この「飛翔」は離脱に通じるように思われる。

> この地上から脱出して、プラトン的な「理念（イデア）の世界」へ逃避的に超越することではない。むしろ、それは、修行の完熟期に達したものが、悟りの「明るい世界」を突破して、明暗によって織りなされた現実世界にもどり、その直下に「明暗双々」の境涯を生きることに他ならない。[6)]

それが、

> 「悟りの『光』の世界」から道の否定的な「闇」の世界へと飛び込んでいくことである。[7)]

要約すると、祈る者がこれまで通りに神を求めて祈るにも関わらず、闇の中に突き落とされたような状況に陥ることがある。その時は、闇に身を投じ、ネガティブな状況を積極的に生きることが道の道標になるといえる。闇もまた神から与えられた道であるからだ。

VI. 祈りを深めるための道標

祈りを深めるには精進し続けるしかないと結論したが、では、どのように精進し続ければ良いのか、という疑問が残る。イザヤ書 58 章に、神に好まれる断食とそうでない断食が書かれている。断食とは本来は悔悛、集中的な祈りという意味でなされる。従って、ここでの「断食」を「祈り」と

読み換えて考察したい。
「なぜあなたは私たちの断食を顧みず苦行しても認めてくださらなかったのですか。」（イザ 58:3）と民の問いに預言者イザヤは神を代弁しこのように答える。

> 見よ、断食の日にお前たちはしたいことをし、お前たちのために労する人々を追い使う。見よ、お前たちは断食しながら争いといさかいを起こし神に逆らってこぶしをふるう。お前たちが今しているような断食によってはお前たちの声が天で聞かれることはない。そのようなものがわたしの選ぶ断食、苦行の日であろうか。葦のように頭を垂れ、荒布を敷き、灰をまくこと、それをお前は断食と呼び主に喜ばれる日と呼ぶのか。
> 私の選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。さらに、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ同胞に助けを惜しまないこと。（イザ 58:3-7）

この引用を参考に、神の求める祈りをまとめる。まず祈りでないものは、形式主義である。宗教的、敬虔な姿をしていても、争ったり、神を軽んじたり、人を大切にしないならば、それは祈りとは言えない。一方、神の好む祈りとは、祈り手が悪と関わらず、他者が悪に虐げられていることも許せない、困っている人を見たら助けずにはおれないことである。神の性質がこの世に実現されると、このように成就すると考えられる。人を助けようとする性質は、モーセが神から聞いた神の名前「わたしはある。わたしはあるという者」 אה'ה אשר אה'ה （出 3:14）の意味する「救いながら在る者」に通じる。

イエス・キリストの行動を参考に、神に好まれる祈りを考えてみたい。カナの結婚式ではワインを飲んで人々と共に新しい夫婦の誕生を喜び祝っている、エルサレムの神殿では、神の家が商売の場所になっていることに激しく怒り、売り買いしている者たちを追い出した。働いてはいけないとされている安息日に足の萎えた人を癒した。

ワインを飲んで喜ぶこと、激しい怒りを表すこと、宗教（社会）規範を破ること、これだけ見れば、祈りと関りがない行いのように思える。しかし彼の行いは、人の幸福を我が事のように喜び、神を愛し、人を大切にした。彼は大胆で、感情豊かで、社会規範に囚われずに人を助けた。

聖書の中でイエスは度々一人で祈っている。祈りは天に帰属し続ける為に必要なのだと思われる。神と一致しようとする気持ちで祈り、天の属性を身に帯びて地上で生きていくと、イザヤ書の引用にあった、神に好まれる断食をする人のように、そしてイエスのように、行動するよう駆り立てられる人となるのではないだろうか。ただし、その行動を実現するには、勇気が不可欠と思われる。なぜなら、これまで従ってきた規範や常識を超える必要があるからだ。祈る人は目に見えない神を確信し、天に生きながら地に天を現して生きていくことで、天と地を繋ぐ者となると考えられる。

祈りは、祈り続けて人の内にしまっておくことはできないもののように思われる。その祈りが、天と繋がるものであったら、低きに、つまり地へと流れ出ようとするように思う。

> ともし火を持って来るのは升の下や寝台の下に置くためだろうか。
> 燭台の上に置くためではないか。（マコ 4:21）

こうイエスが言ったように、天なる光は祈る人の中に隠されるためのものではない。

祈り続け、祈りを豊かにし深めるには、神と交わる祈りと、その祈りによって絶えず自分を天に根差す者としながら地上で積極的に――神と人を愛する衝動を止めずに――生きること、の両方が必要だといえる。

凡例

・聖書からの日本語の引用は日本聖書協会、新共同訳（1999）を用いた。ギリシア語、ラテン語の引用は Deutsche Bibel Gesellschaft, Nestle-Aland Novum Testamentum Graece et Latine（2008）を用いている。

引用文献、注

1）「マグニフィカート」は日曜第一晩課（土曜日の夕方）の福音書の賛歌（Canticum）に定められている。他の曜日の晩課の際には別の福音書の賛歌を選ぶこともできるが、共同体によっては毎日の晩課で必ず「マグニフィカート」を歌うということも稀ではない。

2）Meister Eckhart, 12.Daz ist von sünden, wie man sich dar zuo halten sol, ob man sich in sünden vindet.,*Erfuter Reden Mittelhochdeutscher Text*, Hrsg. Evangelischen Predigergemeinde Erfurt.（E-book）https://www.meister-eckhart-erfurt.de/fileadmin/Meister-Eckhart/PDF/Erfruter_Reden_mhd.pdf（拙訳）

3）ベルンハルト・ヴェルテ『マイスター・エックハルト　その思索へ向かって思索する試み』大津留直訳、法政大学出版局、2000 年、東京。p.239

4）フロレンス・ナイチンゲール『真理の探究―抜粋と注解―』M.D. カラブリア他編、小林章夫監、うぶすな書院、2005 年、東京。p.219

5）門脇佳吉『道の形而上学 - 芭蕉・道元・イエス』岩波書店、1990 年、東京。p.117

6）*ibid.*p.119

7）*ibid.*

参考文献

石井清純『禅問答入門』門川学芸出版、2010 年、東京。

イグナチオ・デ・ロヨラ『ある巡礼者の物語―イグナチオ・デ・ロヨラ自叙伝―』門脇佳吉訳、岩波書店、2000 年、東京。

イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』門脇佳吉訳、岩波書店、1995 年、東京。

十字架の聖ヨハネ『愛の生ける炎』ペドロ・アルペ　ほか訳、ドン・ボスコ社、1992 年、東京。

十字架の聖ヨハネ『暗夜』山口女子カルメル会訳、ドン・ボスコ社、2011 年、東京。

十字架の聖ヨハネ『カルメル山登攀』奥村一郎訳、ドン・ボスコ社、2013 年、東京。

十字架の聖ヨハネ『霊の讃歌』東京女子カルメル会訳、ドン・ボスコ社、2008 年、東京。

聖テレジア『完徳の道』カルメル会訳、岩波書店、1991 年、東京。

聖ベネディクト『ポケット版　聖ベネディクトの戒律』古田暁訳、ドン・ボスコ社、2018 年、東京。

セシル・ウーダム・スミス『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』武山美満智子訳、1981、1991 年、現代社、東京。

マルティン・ルター『マリヤの讃歌』石原謙　吉村善夫訳、岩波書店、2013 年、東京。

Benedikt von Nursia, *Die Benediktsregel Lateinisch / Deutsch*, Hrsg.Ulrich Faust, Reclam, 2018, Ditzingen.

Fidelis Rupper, Anselm Grün, *Bete und Arbeite—Eine christliche Lebensregel,* Münsterschwarzach

Verlag, 1982, Münsterschwarzach.

Gerhard Lohfink,*Das Vaerunser neu ausgelegt*, Verlag Urfeld, 2008, Bad Tölz.

Klaus Riesenhuber, *Die Transzendenz der Freiheit zum Guten—Der Wille in der Anthropologie und Metaphysik des Thomas von Aquin*, Berchmanskoleg Verlag, 1971, München.

Nikolaus Nonn, Matthias E.Gahr, *Sieben Mal am Tag singe ich dein Lob—Eine Einfühlung in das Stunden gebet der Mönche*, Vier-Trüme-Verlag, 2012, Münsterschwarzach.

Meister Eckhart, *Reden der Unterweisung*, Übers. Josef Bernhart, Hrsg.Manfred Weitlauff, Evangelische Predigergemeinde Erfurt, 2015, Erfurt.（E-book）

https://www.meister-eckhart-erfurt.de/fileadmin/Meister-Eckhart/PDF/Reden_der_Unterweisung_-_Meister_Eckhart.pdf